

平成18年
4月号

250円

やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



自然のあり方・本質

ココアプリン

ご病気の方々へのメッセージ

『サトラレ』 Sato;ra-re Tribute to a Sad Genius

驚異のオリーブ

以前「ラン」の花はお金持ちの方の花というイメージが強かったのですが、たまたま展示会を見に行き小さい「ラン」を見た時、花は成長する過程が凄くユックリしているので「生きてる」と感じなかったけど、その時「花って生き物なんだな」と強く思いました。p.24 「オリーブ油には、他のまだ発見されていない特性があると信じられています。これらの特性が発見されれば、その消費量は増加するでしょう。そして同時に、それは新しい薬と治療方法の開発をもたらすでしょう。」p.27



日本を代表する花として誰もが思い浮かべる桜、今年は各地で平年より1週間ほど早い開花となりましたが、その桜も関東地方ではそろそろ終わりの時期を迎えています。花が創造された大きな理由は人間を癒すことなのでしょう。桜とポカポカ陽気に誘われ多くの家族連れや友人同士が戸外に出て、木の下で食べ物を囲んでくつろぎ、歓談している心む風景があちこちで見られました。私自身も、自転車で出かける道すがら、公園の桜並木や玄関先に飾られた色彩豊かな花鉢に目をやりながら、春の空気で体を満たし、春の色彩を目に焼き付けようとしているのに気がつきます。無意識のうちに生の息吹に包まれたいと感じているのでしょう。

夏には冬の寒さが、冬には夏の暑さが想像できなくなるのと同じように、春の訪れや花が一斉に咲き出す様子も他の季節には体感として思い出せなくなってしまいます。そして春が来ると毎年、日差しの暖かさや心地よさ、桜が満開になっていくときの気持ちの高揚感などを、まるで初めて体験するかのように新鮮な驚きとして実感するのです。

雨に打たれ風にあおられて散っていく桜を見ながら名残惜しい気分になっていると、ふとツツジのつぼみが膨らんできているのに気付きました。満開のツツジもまた見事なものです。ツツジが咲く頃は日差しもますます強まり、若葉は青みを増してさらに輝く季節を迎えているでしょう。草木は昼も夜もそこに佇み、時期が来れば花開いてやがて散っていきます。散った後は葉を茂らせたり、また次の季節に備えて変化していきます。

色とりどりの花を咲かせる草木がりのままの姿で個性豊かな美を体現しているのを見ると、個性を無理やり作り出そうとしたり、突飛さや強烈さで競いあったりしている人間のやっていることがただの徒労にも思えてきます。そして日光や雨、大地の恵みから養分を得て過不足ない存在として成長し、相応しい時期・環境のもとで相応しい変化を静かに遂げる花の姿からは、素直さに欠け、降り注がれる恵みにも意識を向けずそれを糧として生きることができていない自分自身の愚かさに気付かされるのです。



編集部より	2
自然のあり方・本質	3
折りのある毎日へ	4
ココアプリン	4
信頼、服従、献身、確信	5
さまざまな分野の知識	9
砂のアトランティス - ウバルとアードの民	12
ご病気の方々へのメッセージ	19
色づく季節に気持ちをあらた	21
『サトラレ』 sato;ra-re Tribute to a Sad Genius	22
今月のインタビュー	24
驚異のオリーブ	25
4月の2作	28





自然のあり方・本質とは、広い意味で存在の全体、その特徴、天性のあり方からくる特性を意味する。人間に関しては、その性質、気質、性格という意味である。これは、どのような形で用いられたとしても、無限の力の持ち主の手によって施された刺繍、創造の主の手にある規則、そしてその英知を語る一つの本である。物質同様、自然も、感覚や意識、意志を持たない。だから、毎日そこで存在させられているこれほど多くの被造物が、意識や意志、知的な計画を必要とする全ての被造物が、その言葉で、無力さ、困窮を訴えている。つまりそれは、背後にある偉大な英知、素晴らしい力、驚異的な意思を高らかに宣言しているのだ。

自然のあり方・本質とは、物質の特性、その天性のあり方であり、その存在において依存している物質より先に存在することはありえない。存在や出来事を自然によるものとし、それによって説明をつけようとするのは欺きに過ぎない。

今日、自然に関する知識に最も関わりの薄い者ですら、自然が、何も見聞きしない力で構成されていること、それが何物をも創造し得ないことを知っている。このような状態にありながら、それを創造主の地位に置こうとすることは、狂信以外の何物でもない。

自然の本質が明らかにされているのに、それを実際とは異なるように示し、次世代へそれを創造主のように教え込むことは、学問に対する反抗であり、それぞれが素晴らしい芸術作品である、この世界という展示場に飾られた全ての古美術品への蔑視でもある。

もし自然が、存在そのものを意味するのであれば、「自然が創造した」という人々は、その言葉によって「存在しているものは自らを自分で造った」ということを意味していると気づいているだろうか。そうではなく、自然という言葉を使うことによって意図するところが性質、特性、性格、規則、法則というものなのであれば、これらにのっての織機のような、あるいは発祥の地であるような物質や出来事を、いかに創造し、整えることができるというのか、説明するべきではないだろうか。¹

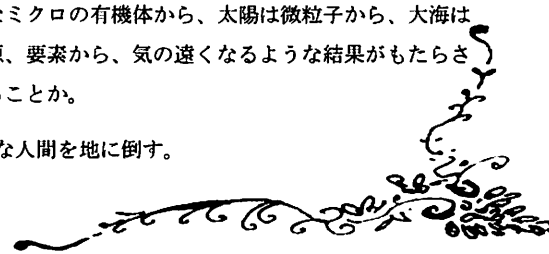


大きなものをその肩に負う、小さなものたち

一本のマッチは、長い長い時間を掛けてできた大きな森林を、あっという間に燃やし、灰にしてしまう。

広大な森は小さな小さな種から、素晴らしい人間はごく小さなミクロの有機体から、太陽は微粒子から、大海は一滴一滴のしずくからできている。このように、ごく小さな源、要素から、気の遠くなるような結果がもたらされる例がどれほどあることか。

特には、豆ほどの物体が、大きな人間を地に倒す。



¹ この文章が“Pearls of Wisdom”よりの訳です。



天を創り給うお方
暗黒をつくり給うお方
秘密を熟知し給うお方
涙をながす者達を慈しまれるお方
隠すべきところを覆われるお方
災難（困難）を取り除かれるお方
死者を復活させ給うお方
善行に最もよく報い給うお方
めぐみを降り注がれるお方
懲罰に確固たるお方

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。
私達を地獄の炎からお助け下さいい。²



ココアプリン

材料：

牛乳 400CC
砂糖 大4
コーンスターチ 大さじ 4
ココア 大さじ 4

作り方：

1. 材料をすべて鍋に入れ、かき混ぜる。粘りが出てきたら、火を止める。
2. 器に入れて、冷蔵庫に入れて冷たくして食べる。

² 偉大なる鎖帷子（ジャウシュヌカビール）には、祈願（きがん）、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鎧が必要です。本来、偉大なる鎖帷子（ジャウシュヌカビール）が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。



タワックル、タスリム、タフウィズ、スィカー(信頼、服従、献身、確信)³

タワックル(信頼)、タスリム(服従)、タフウィズ(献身)、スィカー(確信)は、アッラーに対する信頼に始まり、アッラーの前での自分の無力さや貧しさといったものを完全に意識する中で続き、心の絶対的な平安や平静を得るためにアッラーにすべてを委ねることに終わるといった精神的な旅の4ステップあるいは4つの状態です。タワックル(信頼)は、他に(頼ることのできる)力があつた場合に困惑したり不安になってしまったりするものの、アッラーに対して全幅の信頼を置いている状態を意味します。その程度の確信なくしてタワックル(信頼)について語ることは誤りでしょう。さらに言えば、心の扉が他のものに向かって開いている限りは、タワックル(信頼)を達成することはできません。

タワックル(信頼)は望む結果や意図する結果を得るために必要なことはすべて行い、そして永遠の力を持たれる御方アッラーがご自身の意志を実現されることを期待して待つことを意味します。この後にはタスリム(服従)が続きますが、これは多くのアッラーに近い人々が、アッラーの力と意志の前に、葬儀屋の手の中にある死体のごとくであることだと描写していることです。そして、すべてをアッラーに託し委ね、すべてをアッラーから期待するという、タフウィズ(献身)があります。

タワックル(信頼)は旅の始まり、タスリム(服従)は終わり、そしてタフウィズ(献身)はその結果と言うことができます。そのため、タフウィズ(献身)は幅広い意味を持ち、旅を始めたばかりの人よりも旅路が終わりかけた人に関係があります。タフウィズ(献身)の次はスィカー(確信)ですが、それはアッラーの力と富の前では自分は無力で貧しいということの自覚と、心の中で「アッラー以外には力も強さもない」ということの意味を感じる能力を必要としています。また、「アッラー以外には力も強さもない」という神聖な宝に最大限に依存することと、そこからの助けを期待することも必要とされています。言い換えると、タフウィズ(献身)はアッラーへの道の旅人がタワックル(信頼)という時点と自分の良心において救いを求める時点において警告されること、そして自分の無力さと貧しさにまさに気が付いて、力と意志の唯一の源アッラーに向かい「私を手で抱きしめてください。私を抱きしめてください。あなたがいないければ私は何もできません。」と言うことを意味しているのです。

タワックル(信頼)が現世と来世のすべてをアッラーに委ねることだとしたら、タフウィズ(献身)はすべてを行われるのも、すべての結果をもたらされるのも、多くの人が自分がやったと思うよう事柄や行為すべてを造り出されるのも、実はアッラーであるということに完全に気付いていることを意味します。タワックル(信頼)はアッラーを信頼し、アッラー以外のものや人に対して自分の心の扉を閉じることを意味しています。これは崇拜行為の義務の外面的な達成と、存在するものすべてを維持管理される唯一の御方アッラーへの内面的忠誠と捉えることができるでしょう。これについてはシハーブが次の対句で表現しています。

³ この文章が“Key Concepts in the Practice of Sufism”よりの訳です。

すべての事柄について最も慈悲深い御方に頼りなさい。

アッラーに頼る者は決して失敗することはない。

アッラーを信頼しアッラーがあなたに対してなされることに耐えなさい。

アッラーのご好意としてのみ、あなたはあなたがアッラーに望むものを手に入れることができるのです。

二代目カリフ、ウマル(彼にアッラーのお喜びあれ)は、アブー＝ムーサー・アッ＝シャーリに書いた手紙の中で同じ点について注意しました。「もしあなたがアッラーが命じられることを何でもどのようにでも甘受することができるのであれば(すなわち、あなたに降りかかることの何に対しても不平を感じることなくいられたら)、それはとても素晴らしいことです。もしそうでできないのであれば、忍耐をもって耐えなさい。」

別の観点から見ると、タワククル(信頼)はアッラーに対する信頼と確信を示しています。タスリム(服従)は精神的な人生に目覚めた人々の状態のことです。タフウィズ(献身)は旅人たちが手段や原因について考えることによって引き止められることがないことを意味しますが、それは精神的に高いところに辿り着いた人々の特別な状態と言えます。

タフウィズ(献身)を得た旅人たちが手段や原因に一定の重要性を見いだしているように見えたとしても、それは彼らが手段や原因の球体であるこの物質的世界に住んでいるという事実ゆえのことです。アッラーはこの世界ではどんな成果も一定の準備段階を基にして得られるようにされました。もし彼らが手段や原因を優先させ、それによってアッラーが御自身の望まれるようにすべてを保有しておられるという事実をなおざりにしたならば、彼らはもともと天国の最も高いところを飛ぶ鳥に似ているにも関わらず、地面を這う害虫ようになってしまおうでしょう。このことは敬虔な人々の人生についての本で述べられています。前進しようとしていたものの手段や原因について考え過ぎてしまった敬虔な人々が次の言葉を聞くのです。

予防しようとするのは諦めなさい。予防に没頭すると滅亡を呼ぶことになる。

あなたのすべてを我々に委ねなさい。我々はあなた自身よりもあなたについて考えているのだから。

このような献身は、人々の中に生きてもアッラーとの関係を遂げられる人々によってのみ達成されることのできる英雄的行為です。

自分の力で効果のある努力ができたと考えることなく、ある結果を得るために必要なことを行うということは、それぞれの人によって異なる意味を持つでしょう。すべての人にとってタワククル(信頼)という意味を持ちます。目に見える次元を超えた現実に気が付いた人々にはタスリム(服従)という意味も、真の心の平安や平静を得た人々にとってはタフウィズ(献身)やスィーカ(確信)という意味も持ちます。次のアッラーの使徒様(彼の上に平安と祝福あれ)の努力とタワククル(信頼)やタフウィズ(献身)とを結び付けるお言葉は何と素晴らしいものなのでしょうか。「もしアッラーに対する真実の信頼というものをあなたが持つことができたなら、アッラーがあなたがたに与えるものは、朝には空腹で巣を飛び立ち夕には満腹で巣へ戻る鳥たちに与えられるものようであったであろう。」

この預言者のハディースは異なった精神的レベルの人々にとって異なった真実を含んでいます。ルーミーは次のように述べています。

アッラーに対する信頼が道しるべだとしても、

預言者は準備を実行された。

彼は大きな声で(ベドウィンの質問に答えて)言われた。

まずラクダを結びなさい。そしてそれからアッラーに頼りなさい。

これは『信頼する者たちは、アッラーにこそすべてを御任せすべきである。(聖クルアーン 14:12)』で示されたことの意味です。

純粋な精神的レベルで生きている人々は、アッラーの前での自分の無力さと弱さを完全に気付いているため、アッラーの力と強さを全面的に信頼すべきであり、葬儀屋の手の中の死体のようになるべきだと理解しています。『あなたがたがもし(真の)信者ならば、アッラーを信頼しなさい。(5:23)』「アッラーの中に自己を消滅させること」や「アッラーとともに生きること」の頂上の周りを飛んでいる人々に関しては、彼らは、預言者イブラヒーム(彼の上に平安あれ)のように、火に投げ込まれるときでも『わたしは、アッラーがいれば万全である。(39:38)』と言い、すべてをアッラーに委ねるのです。彼らにとっては万能の神アッラーが自分の状態についてご存じていてくれることだけで十分なのです。

また最も深いタワククル(信頼)というものをアッラーの使徒様(彼の上に平安と祝福あれ)に見ることができます。メディーナへの聖遷の際に、親友アブー・バクル(彼にアッラーのお喜びがありますように)と共に隠れていた洞窟から追手の足が見え彼らの声が洞窟にこだましたとき、彼は全面的にアッラーを信頼され、アブー・バクルにおっしゃいました。『心配してはならない。アッラーはわたしたちと共におられる。(9:40)』これは次のアーヤでも述べられています。『アッラーを信頼する者には、かれは万全であられる。(65:3)』

タフウィズ(献身)とスィーカ(確信)はアッラーに対するタワククル(信頼)の最も高いレベルのもので、このレベルに達成した人々は、外面的内面的感情と同様に、自分の理性や論理、信仰までもをすべてアッラーのご命令に服従しています。その結果、彼らはアッラーの美名すなわち特性と行為が映される「磨かれた鏡」になるのです。このようなレベルのしるしは、アッラーが定められたことの中に予防することも含まれていることを理解すること、そしてそれによって平安を得ることです。自分の意志力はアッラーの御意志のおぼろげな影だと見て、アッラーの御意志に向かいます。そしてアッラーがなされることが喜ばしいことであってもそうでなくても、それに満足し、自分に起こることすべてを認めるのです。

ミンハジの著者はこのレベルのタフウィズ(献身)について次のように描写しています。

私は自分のすべてを愛おしい御方に委ねる。

彼が私を生かそうとも死なせようとも。

アンダルのワシフの次のような言葉もとても適切です。「定められたことは必ず起こる。だからアッラーに委

ねなさい。悲しむことも痛みにも苦しむこともなく。」

タフウィズ(献身)の描写のうち最も美しいものの一つはイブラヒーム・ハッキのタフウィズナマ(タフウィズの説明)でしょう。その最初の節は次のようです。

アッラーは悪を善に変えられる。

逆を行われるとは決して考えてはならない。

アッラーについての知識を持つ者は

敬服してアッラーの行われることを見る。

我々の主のなされることを見ようではないか。

彼はなされることすべてを上手にされる。

真実の御方アッラーを信頼なさい。

そしてアッラーに委ねなさい。

そうすれば平安を得ることができるでしょう。

(アッラーのなされることすべてに) 忍耐強くあり、また認めなさい。

我々の主のなされることを見ようではないか。

彼はなされることすべてを上手にされる。





4 さまざまな分野の知識

ここでは、預言者ムハンマドが、さまざまな分野の学術的なことに関して語られた言葉が、やはり御自身の正当性を証明しているということを簡単な形で説明したい。

預言者ムハンマドは、それらを十四世紀前に語られた。それから今日まで、学問は大きな進歩を遂げ、目が回るほどの発展を見た。その結果、預言者ムハンマドが語られたことが、それぞれの分野の最高峰にある学者たちによって学術的に確かめられたのである。今日まで、預言者ムハンマドの語られたことのどれ一つとして、偽りであったものはない。

急速に進歩する科学、工業、技術などは、それらに参ってしまった知識人がこれほどいるのにも関わらず、それらに顔をそむけ、預言者ムハンマドに礼儀をもって、尊敬を込めて頭を下げ「あなたの言うことは正しい」と言っているのである。預言者ムハンマドはアッラーの使者であられるのだから、これは当然のことである。

ここでは、学術的な分析は専門の本に譲るとして、我々が選んだいくつかのたとえを紹介してみよう。



全ての病にその治療法がある

預言者ムハンマドは、ブハーリーが伝えるハディースで、このように述べておられる。「アッラーが創造された病気には、治療法がないものはない」⁵

つまり、いかに沢山の種類の病気があっても、必ずアッラーはそれらのための解決法、治療法をも創られておられるのである。医学の分野において、学問への激励としてこれまで語られた言葉の中で、最も普遍的で幅広いものは、預言者ムハンマドのこの言葉であろう。病気があれば、そこに治療法もある。つまり、いつの日にか、全ての病気の、治療法が発見されるであろうということである。もちろん、アッラーの助けによって。

アブー・ダーウードが伝えるところによると「全ての苦しみに薬がある」と言われたという。⁶

他のハディースでも「注意しなさい。治療に誤りがあってはならない。アッラーは、全ての病気の後ろに

⁴ この文章は“Prophet Muhammad: Aspects of His Life-1”よりの訳です。

⁵ Bukhari Tib, 1

⁶ Abu Dawud, Tib 10; Muslim, Salam 69

その治療法も作られた。ただ一つ、治療法のない病気がある。それは老いである⁷とされている。

寿命が延び、死を遅らせることができるようになったとしても、人間は決められた道をたどるしかないのである。その道というのは、魂の世界から始まり、子供時代、若者時代、老年時代、そして墓場へと続くのである。そこから最後の審判の日へと延び、天国や地獄に行つて終わる道である。この道をふさぐことはできない。人は生まれ、成長し、老い、死ぬのである。ただ、それ以外の全ての苦しみにはその解決法があるそれらは研究によって見つけられるであろう。

預言者ムハンマドはこの、そしてこれに類似する説明によって、全ての学問を激励し、全ての学者、研究者たちを探求へと招いているのである。予算から費用を出しなさい、研究所を作りなさい、死に到るまでの全ての病気の解決法を研究し、そして病気をおさえなさい、と。

人間が達する科学の最高の段階

そもそも聖クルアーンでも、常にこのことが奨励されている。預言者たちの奇跡という形で、学問への奨励が示されている。預言者たちがその人生で人間たちを導き、彼らを誤った道から正しい道へと誘導したのと同じように、立証された学問、知識に光をもたらす学問という分野においても、人間たちを導く使命が与えられた。それぞれが、特定の分野で導師となり、道を示したのである。つまり、人間に関する学問は、精神的、物質的な進化においてその鍵を預言者たちから受け取ったのだ。聖クルアーンで預言者たちの奇跡が説明されているのは、それらの奇跡が到達した地点まで到達する道において、人々の励ましとなるためである。

例えば、聖メシアは、死人を甦らせている。聖クルアーンでもそのことが述べられている。ただ、これは最高の段階である。人間の学問はそこで終わる。なぜならそこから先は奇跡であるからである。人間の力、人間の能力、人間の意志によって彼らができることは、被創造物としての法則を超えることはできない。科学や技術の驚異がどの段階に達したとしても、奇跡の段階を超えることはできない。この段階は、預言者たちのみのものであり、永遠にそれは変わらないであろう。そう、その段階ではただ預言者たちのみが活動できる。その代わり、奇跡の前の段階までは、人間の学問の発達は可能であり、また全ての奨励もそもそもそのために行なわれているのである。

聖メシアの奇跡によって、聖クルアーンは次のように奨励しているのである。病気の治療は、死に届く段階まで可能である。さらには、癌やエイズのような治療法が見つからない病気でも、必ず治療法は存在する。研究し、見つけなさい。以前は治療法がないと思われていた病気でも、今日楽に治療できるものがある。努力すれば、治療法を見つけることはできるだろう。

さらに、例えば聖ムサーによって示された奇跡で、命のないものに何かをさせることが可能だと言う例

⁷ Tirmidhi, Tib 2; Ibn Maja, Tib 1; Ibn Hanbal, Musnad 4/278



が示されている。今日、これは研究されている。しかし、人間は決して、手に持っている杖を投げてそれを蛇にすることはできないであろう。なぜなら、これは奇跡として行なわれたことであり、我々のできる範囲のことではない。

ここで、人間にとって到達することのできないもう一つの奇跡である、聖クルアーンについて語ることは適切であると思われる。聖クルアーンは、文学的にも最高水準であり、何者かがそこに到達することは不可能である。最高の詩人がうたった言葉や人々をひきつける説明などは、いつか聖クルアーンの扉のところまで到達するかもしれない。しかしそこで、詩人レビドのように、驚愕の中で立ちすくむだろう。なぜならそれは奇跡であり、どんなに素晴らしいものであったとしても人間の作ったものは奇跡ではあり得ないからである。

これはまた別のテーマであり、ここではこれ以上触れず、このテーマは別の章に譲ろう。

預言者たちの奇跡は、少し前で述べたように、まさに一つの段階を形成している。そして、人間の学問に地平線となっている。同時に、聖クルアーンも、読まれることによって人間を励ますという任務を果たしている。それ以降は、人間の努力に任せられているのである。⁸

人間は努力し、その地点に到達しなければならない。彼らができることは全て克服し、奇跡の段階に近づかなければならない。奇跡の果実のある、地平線に到達しなければならない。

人間は医学の分野において、死に届くところまで進歩することが可能である。しかし、死にいたってしまうと、もはやどうすることもできない。死は、命と同じで、アッラーの創造によって存在するものであるからである。「かれは死と生を創られた方である」(大権章67/2)という章はこれを示している。

死とは、消滅や腐敗や分解ではないのである。それはアッラーの命令と希望によって、その日まで与えられていたものが取り戻されたということである。だから、学問という面での奨励も、ここまでなのである。宗教のために活動する者は皆、この奨励を受け止め、取り入れるべき形で取り入れ、活用しなければならない。そして、その活動のためになるものとしなければならない。



⁸ 参照 サイド・ヌルスィ,第20ことば,2段,まえがき



砂のアトランティス - ウバルとアードの民

「またアードは、唸り狂う風によって滅ぼされた。7夜8日にわたり、かれらに対し絶え間なく（嵐が）襲い、それで朽ちたナツメヤシの木のように、（凡ての）民がそこに倒れているのを、あなたは見たであろう。それであなたは、かれらの中、誰か残っている者を見るのか。」（真実章 69:6-8）

クルアーンのいたるところに「滅ぼされた」民についての記述があるが、そのひとつにアードの民がある。（ヌーフ（ノア）の民の後に言及される）預言者フードはこのアード達に送られ、かつての預言者達と同様、唯一であられるアッラーを信じ預言者である自分に従うよう説いた。ところが人々は憎しみをもちて彼に対抗し、フードを軽率な言行や先祖を冒瀆したなどの罪をさせた。そのやり取りがクルアーンに詳細に記載されている。

『（われは）アードの民に、その同胞のフードを（遣わした）。かれは言った。「わたしの人びとよ、アッラーに仕えなさい。あなたがたには、かれの外に神はないのである。あなたがたは（神々を）捏造しているに過ぎない。人びとよ、わたしはこれ（消息）に対して、何の報酬もあなたがたに求めない。わたしの報酬は、わたしを創られたかれの御許にだけあるのである。あなたがたはそれでも悟らないのか。わたしの人びとよ、あなたがたの主の御赦しを請い求め、悔悟してかれに返れ。かれはあなたがたの上に天（から雲）を送り、豊かに雨を降らせ、あなたがたの力に更に力を添えられる。だからあなたがたは背き去って、罪を犯してはならない。」かれらは言った。「フードよ、あなたはわたしたちにたった一つの明証すら、齎さない。わたしたちは（単なる）あなたの言葉のために、わたしたちの神々を捨てない。またあなたの信者にもならない。わたしたちの神々のあるものが、邪悪な言動であなただを魅惑したのだと言うだけである。」かれは（答えて）言った。「わたしは、立証をアッラーに御願ひする。あなたがたも、わたしが（神々を）配することに、関りないことを証言して下さい。かれ以外（の神々を仲間とし）て、皆でわたしに対し策謀しなさい。何も猶予はいらない。わたしの主であり、あなたがたの主であられるアッラーを、わたしは信頼する。凡ての生きもの一つでも、アッラーが、その前髪を掴まれないものはない。本当にわたしの主は、正しい道の上におられる。仮令あなたがたが背き去っても、わたしはあなたがたのために、与えられたものを既に伝えた。主はあなたがたの代りに、他の民を継がせられた。あなたがたは少しも、かれを害することが出来ないのである。本当にわたしの主は、凡てを見守られる。」わが命令が下った時、われの慈悲によってフードとかれと共に信仰する者たちは救われた。われは酷い懲罰から、かれらを救ったのである。これは、アード（の民のこと）であった。かれらは主の印を拒否し、かれの使徒たちに背き、それぞれの勢力者、頑迷な反逆者の命令に従った。それでかれらは、現世でも復活の日でも、呪いに付き纏われた。ああ見よ、本当にアードは、かれらの主を信仰しなかった。ああ見よ、フードの民（の視界から）アードは消された。』（フード章 11:50-60）

詩人たち章（アッ・シュアラウ）にもアードについての記述がある。

ここではアードの民の特徴について特に述べられている。それによると、『アードの民は「高地とい

う高地に碑を建て」..そして「(永遠に)住もうとして自分たちのために高樓を建てる」そのうえ、彼らは「暴力を振るうとき、暴虐者のように振舞った。」フードが彼らに警告したとき、人々は彼の言葉が「昔のやり方に外ならない」といって懲罰されないことを確信していた』とある。

『アード(の民)も、使徒たちを嘘付きであるとした。かれらの同胞のフードがかれらに言った時を思い起せ。「あなたがたは主を畏れないのですか。本当にわたしは、あなたがたへの誠実な使徒です。だからアッラーを畏れ、わたしに従いなさい。またわたしは、このことでああなたがたに報酬を求めません。わたしへの報酬は、只万有の主から(いただく)だけです。あなたがたは高地という高地に悪戯に碑を建てるのですか。またあなたがたは(永遠に)住もうとして、堅固な高樓を建てるのですか。あなたがたは暴力を振るう時、暴虐者のように振舞うのですか。アッラーを畏れ、わたしに従いなさい。あなたがたが知る程のものを、授けられる方を畏れなさい。かれは数々の家畜と子孫を、あなたがたに授けられ、また果樹園や泉をも授けられた。わたしはあなたがたに加えられる偉大な日の懲罰を本当に恐れる。」かれらは言った。「あなたが説教しても説教しなくても、わたしたちにとっては同じことです。本当にこれは、昔のやり方に外なりません。わたしたちは懲罰されないのです。」かれらは、かれを嘘付きであるとした。そこでわれはかれらを滅ぼした。本当にこの中には、一つの印がある。だがかれらの多くは信じない。本当にあなたの主は偉力ならびなく慈悲深い御方であられる。』(詩人たち章 26:123-140)

フードに対して憎しみをあらわにし、アッラーに反逆したこの民は見事に滅ぼされた。砂嵐がアードの人々をのみ込み、まるでそこに存在しなかったかのように消え去ったのである。

イラムでの発見

1990年代始め、世界の主要紙がこぞって「失われたアラビア都市発見」、「伝説のアラビア都市発見」「砂のアトランティス-ウバル」などの記事を掲載した。この発見された都市はクルアーンで言及しているということもあり、より皆の注目を集めた。それまで多くの人がこの都市は単なる伝説であり、位置も確認するのは不可能としていたし、当時この都市はベドウィンの昔話の中にしか出てこなかった。そのため人々は驚きを隠すことができなかった。

クルアーンに記述されたその都市の発見者はニコラス・クラブ、アマチュア考古学者である。アラブ好きでドキュメンタリー映画製作者でもあるクラブは、アラビア史を研究中、偶然にも非常に興味深い本を見つけた。この本はアラビアフェリックスといい1932年、イギリス人研究者のベルトラムトーマスを書いたものである。アラビアフェリックスとはローマ人がアラビア半島の南部を指すのに使った名で、今日ではイエメンとオマーンの大部分を指す。ギリシャ人はこの地域をユデイモンアラビア、中世のアラブ人学者はここをアルヤマン・アッサイダと呼んでいた。これらの名すべては「幸いなアラビア」を意味する。かつてその領域に住んでいた人々がその時代の最も幸福な人々であったからだ。

ではなぜその地域は幸福であったのか?理由の一つはその恵まれた立地条件にあった。インドと北アラビア半島の都市との間ではスパイス貿易が盛んでこの地域はその仲買人的機能を果たしていた。そのうえ、この地域の人々は希少な木々からとれる香りの高い樹脂である乳香を生産し各地に輸出していた。乳香は古代の共同体によって非常に支持され、お香として様々な宗教の儀式で使用された。当時は少なくとも金と同様の価値があったのである。

イギリス人研究者のトーマスは、この「幸運な」部族について詳細に記述し、数ある中の一つの部族の古都の跡を見つけたと主張した。この都市がベドウィンに知られるウバルである。彼がこの地域に旅行した際、砂漠に住んでいるベドウィンが古い道跡を指さして、この道はウバルに通じていると彼に言った。トーマスは深い関心をもったが研究半ばでこの世を去ることになった。

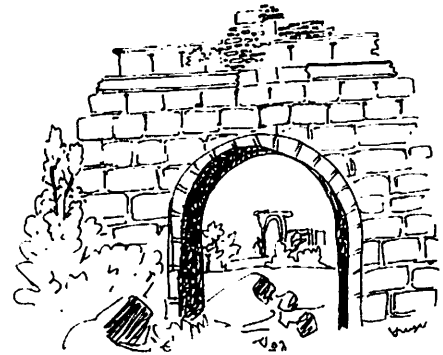
ウバルでの発掘

トーマスの研究を読んだクラブは本に記述された都市の存在を確信し、まもなく研究にとりかかった。彼はウバルの存在を立証するため2つのことにとりかかった。一つは、ベドウィンが示した道を発見することである。彼は領域の衛星写真を撮ってもらうためNASAに了解を得る説得をはじめた。続いてカリフォルニアのハンティントン図書館にある古代文献と古代地図を研究しはじめた。

彼が見つけたものは紀元前200年にギリシャ系エジプト人の地理学者プトレミーによって作成された地図だった。その地図には旧市街の位置とその都市に通じる道が示されていた。その後クラブは、長い説得の末NASAが衛星写真を撮ったというニュースを受けとった。衛星写真には、肉眼で特定するのが困難なキャラバン道の全体像をみてとることができた。これらの写真と持っている古代地図とを比較して、古代地図の道が衛星写真の道に対応していること、またこの道の到達する所がかつての都市であったことなどを最終的に結論づけた。ベドウィンの昔話にでてくる伝説の都市の場所はこうしてみつかり、まもなく砂の下の旧都市は姿を見せた。これが滅ぼされた都市、砂のアトランティス-ウバルである。

ではなぜこの都市がクルアーンで記述されたアードの民の都市であると証明されたのだろうか？その理由は発掘が始まった時点から、構造からしてクルアーンで述べられている柱がいくつも発掘されたことが挙げられる。発掘を率いた調査チームのメンバー、ザーリンズ博士は「ウバルの特徴は複数の柱で、これはクルアーンに書かれている円柱の並び立つイラムの都であることの強い証拠である」という。クルアーンには次のように述べられている。

「あなたはアッラーが、如何にアード（の民）を処分されたかを考えないのか、円柱の並び立つイラム（の都）のことをこれに類するものは、その国において造られたことはなかったではないか。」（晩章 89:6-8）



アードの民

ウバルがクルアーンで言及されるイラムの都市である可能性が高いと述べたが、クルアーンによると、アッラーからのメッセージを伝え、警告した預言者フードに耳を傾けなかったためこの都市の住民は滅びたとある。イラムの都市を築いたアードの民についてのアイデンティティについては多くの議論がある。歴史的な記録にアードの築いたような発達した文化もしくは文明の確立についての記録が全くない。それだけの民族が歴史的に名を残していないのはかなり奇妙であるが、一方で、古文書やアーカイブでこれらの民の存在を確認できないのはそれほど驚くべきことではないかもしれない。

その理由はこれらの人々が南アラビアに住んでいたということである。南アラビアは、メソポタミ

アヤ中東の人々からは遠方の領域であり、制限された関係しかなかった。人々に知られない国が記録に残されていないのはよくあることである。またアードが記録されなかった一番の理由は、当時その地域では一般的に文字でコミュニケーションしていなかったことが挙げられる。

したがって、アードは文明を築いたが文字の発展した他の文明のように歴史的記録がなかったと考えられる。この文化がもう少し長く存在していたなら、今日、私たちはアードの民についてより詳しく知ることができたはずである。というわけでアードについて文字での記録は全くないが、彼らの子孫に関する情報からこの民がどんな人々であったのかを探ってみたい。

ハドラマイツ、アードの子孫

アードもしくはその子孫によって築かれたといわれる文明の跡を探す上で重要な手がかりとなるのは、砂のアトランティス-ウバルが見つかり「幸いなアラビア」といわれる南イエメンである。南イエメンでは、ギリシャ人によって「幸いなアラブ人」と命名される前に4つの民族ハドラマイツ、サバエアンズ、ミナエアンズ、カタバエアンズが存在していた。これら4つの民族はしばらく隣り合いながらそれぞれの領土を支配していた。

現代の科学者の多くが、アードはある変化をとげてから歴史上に現れたと言っている。オハイオ州立大学の研究者であるミカイルH. ラフマン博士は南イエメンに住んでいた4つの民族のひとつハドラマイツの先祖がアードであったと信じているひとりである。紀元前500年頃に現れたハドラマイツだが「幸いなアラブ人」と呼ばれる人々のうちではあまり知られていない。ハドラマイツは、非常に長い間南イエメンに君臨して、長期衰退ののち完全に姿を消した。

ハドラマイツからくるハドラミという名前は、彼らがアードの子孫であることを示している。紀元前3世紀のギリシャ人作家のプリニーは、このハドラマイツを「アドラミタイ」と呼んでいた。ギリシャ語の名前は名詞接尾語で終わるので(ここでの名詞はアドラム)、それがクルアーンに言及されている「Ad-iram アーディ・イラム」が崩れた可能性を示唆している。

ギリシャ人地理学者のプトレマイオス(西暦150-100)は、アラビア半島の南を示してアドラミタイという人々が住んだ場所と言っていた。この領域は最近まで「ハドラマウト」の名前で知られていた。ハドラミ州の首都シャブワーフはハドラマウトバレーの西に位置する。数多くの古い伝説によるとアードに送られた預言者フードの墓はこのハドラマウトにあるそうだ。

ハドラマイツがアードの子孫であることを示すもうひとつの要素は、彼らの富である。ギリシャ人はハドラマイツを「世界一豊かな部族」と定義していた。歴史的な記録によると、ハドラマイツは当時最も貴重な植物の1つだった乳香の生産に非常に優れていたとある。彼らは、植物の新しい分野での用法を発見し、それを広範囲に広めた。ハドラマイツの乳香生産は現代の生産量よりはるかに高かったと予想される。

1975年に始まったハドラマイツの首都であったといわれるシャブワーフの発掘では、砂丘が深く町の発掘は困難を極めたが、現れた古代の町は今までになく興味深いもののひとつであった。砂の覆いがとられるとイエメンにある他の遺跡よりもはるかに広範囲に城壁を巡らした都市があらわれ、そこにある官

殿は非常に荘厳な建物だった。ハドラマイツがこの卓越した建築技術を先祖であるアードから受け継いだと思うのは当然のことであった。フードはアードの人々に警告した。

「あなたがたは高地という高地に悪戯に碑を建てるのですか。またあなたがたは(永遠に)住もうとして、堅固な高樓を建てるのですか。」(詩人たち章 26:128-129)

シャブワーフで見つかった建築物の他の特徴は精巧につくられた柱だった。イエメンの他の遺跡でこれまでに見つかった柱は四角く単調な柱ばかりだったが、シャブワーフの柱は丸く、円形に配置されていた。シャブワーフの人々は彼らの先祖アードの民から、この建築様式を受け継いだに違いない。9世紀のコンスタンティノープルのギリシャビザンチン家長だったフォティウスは現在では存在しないギリシャの古文書、特に紅海に関する本であるアガサラカイズ(紀元前 132年)を用いて南アラブ人と彼らの商業活動について細かい研究を行った。フォティウスは言っている。「彼ら(南アラビア人)は金や銀で覆われた柱を築き上げた。この柱に囲まれた空間は実にすばらしい。」フォティウスの上の言葉は直接ハドラマイツに関して言ったことではないが、この地域に住んでいた人々の豊かさと建物のすごさを垣間見れるのではないか。

ギリシャの古典作家のプリニーとストラボはこれらの都市について「美しい寺と宮殿に飾られている」と説明している。これらの都市の所有者がアードの子孫とすればなぜクルアーンがアードの住まいを「円柱の並び立つイラム(の都)」(暁章 89:7)としたのか明確に理解できるだろう。

アードの泉と庭園

今日、アラビア南部を旅すると果てしない砂漠に誰でも遭遇する。町と造林された領域を除いてはほとんどの場所が砂で覆われ、これらの砂漠は多分何百年も何千年もの間そこに存在しているのだ。しかし、クルアーンにはアードについての興味深い一節がある。預言者フードが民に警告する際、アッラーが授けた泉と果樹園について話しているのだ。

「アッラーを畏れ、わたしに従いなさい。あなたがたが知る程のものを、授けられる方を畏れなさい。かれは数々の家畜と子孫を、あなたがたに授けられ、また果樹園や泉をも授けられた。わたしはあなたがたに加えられる偉大な日の懲罰を本当に恐れる。」(詩人たち章 26:131-135)

上で述べたとおりイラムの都市が確認されたウバルや他にアードが住んでいたとみられるいかなる場所も今日は砂漠で完全に覆われている。ではなぜフードは彼の民に対してそのような表現を使ったのだろうか？答えは気候変化の歴史に隠されている。記録によれば、今砂漠になってしまったこれらの地域は一時非常に生産的で緑豊かな土地であった。2, 3千年まえのアラビア南部の大部分は、クルアーンにもあるが緑と泉で覆われ人々はこれをうまく利用して生活していた。森があったお陰で砂漠の厳しい気候が和らぎ、より住みやすい環境にあった。砂漠もあるにはあったが今日ほど大きくはなかった。

また、アラビア南部のアードがかつて住んでいた地域から高度に発達した灌漑システムがみつかった。この灌漑システムは唯一の目的、農業のためにつくられたのである。この地域では、今日では不可能だがかつて土地は耕作されていた。衛星写真によると、サバタヤンのあるラムラットで周辺の町 20万人を養えるほどの灌漑に用いられた大規模な古代運河が明らかになった。研究を行った一人のドウさんは言う、「土地が良く肥えていたのはマーリーブの周辺領域で、かつてはマーリーブからハドラマイトまで一帯が耕作

されていたとみてとれる。」

ギリシャ人の古典作家のプリニーは、この地域を肥沃で霧に覆われた山、川、そしてどこまでも続く森と書いている。ハドラマイトの首都シャブワーフの近くにあるいくつかの古代の寺院で見つけられた碑文には、この地域では狩が行われ、いけにえが捧げられていたとあった。これらすべては、ここ一帯が沃地だったことを物語る。パキスタンのスミソニアン研究所が行った砂漠の侵食のスピードの研究によると、中世にかけて肥沃な土地であった場所が6メートルもの砂丘に覆われたところでは一日に6インチ(約14cm)ものスピードで砂漠が拡大していた。

この速度では、最も高い建物でさえ砂に飲み込まれ、存在しなかったかようになってしまう。1950年代にイエメンのティムナで発掘された遺跡は再びほぼ完全に侵食されてしまった。エジプトのピラミッドもかつて完全に砂の下にあったが、長い発掘の末に太陽をのもとに顔を出した。すなわち、今日砂漠である場所もかつてはまったく違った外観だったかもしれないといえるのだ。

アードはどのように滅びたのか？

クルアーンでは、アードは「荒れ狂う風」によって滅びたとある。ある節にはこの荒れ狂った風が7晩と8日の間続いてアードを完全に破壊したと書かれている。

「アード(の民)も(真理を)虚偽であるとした。それでわが懲罰と戒めとはどうであったか。われは災厄の打ち続く日に、かれらに対し荒れ狂う風を送った。すると人間は、根こそぎになった。ナツメヤンの切り株のように、むしり去られた。」(月章 662: 18-20)

「またアードは、唸り狂う風によって滅ぼされた。7夜8日にわたり、かれらに対し絶え間なく(風が)襲い、それで朽ちたナツメヤシの木のように、(凡ての)民がそこに倒れているのを、あなたは見たであろう。」(真実章 69:6-7)

以前警告されたにも関わらず、人々は警告を全く気にもせず預言者を拒否し続けた。破壊が迫ってきてもなにが起こっているのか全くわからないほど彼らは迷いのうちにあり、なお否定し続けた。

『その時、黒雲がそれぞれの谷に押し寄せて来るのを見て人々は言った。「この雲では、一雨来るぞ。」すると(声があった)。「いや、それはあなたがたが催促するもの。それに伴う風こそは痛ましい懲罰で、』(砂漠章 46:24)

この節では、人々は災難をもたらす雲を見たとあるが、それが何であるかが理解できずただの雨雲だと思ったと述べられている。これは災難がどう人々に近づいてきたかの重要な手がかりである。なぜなら砂漠の砂を巻き上げる大竜巻もまた遠目では雨雲のように見えるからである。アードがその外観にごまかされ、災難に気付かなかったことも十分に考えらる。

「ダストか砂嵐が始まる時は、強い上昇気流と風によって何千フィートもの高さまで持ち上げられた砂の空気の壁が接近してくる。」とドウは(個人的な経験から)砂嵐の様子を説明している。

アードの遺跡と思われる砂のアトランティス、ウバルは厚さ何メートルにもなる砂の層の下から発見された。クルアーンの記述のとおり唸り狂う風が「7夜、8日」の間続き、町の上に蓄積した莫大な砂によって人々は生き埋めとなった。ウバルでされた発掘はこれを物語っていた。

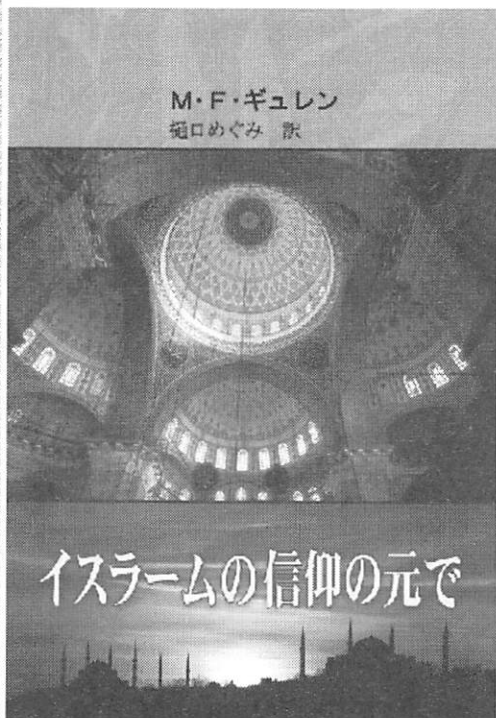
フランスの雑誌、モンテレッセには「ウバルは嵐の結果、12メートルの厚さの砂の下に埋められた」と書かれている。アードが砂嵐によって滅ぼされたという最も重要な証拠は、アードの居場所を指し示すアハカーフ（砂丘）というクルアーンの言葉である。砂漠章（アル・アハカーフ章）の21節での記述にはこうある。

『アードの同胞〔フード〕を思い起こしなさい。われがかれの民を砂の丘で戒めた時、確かにかれ以前にもまた以後にも、警告者たちが来て、「アッラーのほか崇拜してはならない。本当にわたしは、偉大な日の懲罰を、あなたがたのために恐れる。」（と言った。）』

アハカーフというのはヒクフの複数形で、アラビア語で「砂丘」を意味する。これはアードが砂丘の多い地域に住んでいたことを示しており、砂嵐によって砂に埋まったという事実の最も論理的な証拠にもなる。1つの解釈によると、アハカーフは本来の「砂丘」の意味を失い、アードの住んでいた南イエメンの地域の名前となったということである。この地域のあふれるほどの砂の丘からアハカーフということがこの地域特有の呼び名となったのだ。

新しい本 2 冊出版されました! (ご注文をメールや手紙や HP からお待ちしております。)

「イスラームの信仰の元で 1200 円」
(280 ページ)



「ジャウシャン・カビール 750 円」
“アッラーの美しい御名と属性を知らせるお祈り”
(110 ページ、カラー、プラスチックカバー)



<http://www.isuramu.com/>

ご病気の方々へのメッセージ

第20の治療薬

ああ、その苦しみのために方策を求めている患い人よ。病気は、二つに区別することができる。一つは真実のものであり、もう一つは被害妄想である。真実の病に対しては、英知と偉大さによって健康を与えられるお方アッラーがこの世を巨大な薬局とされ、全ての苦しみに



対して治療策を備えられておられる。全ての苦しみに、それぞれに適した方策を備えられたのである。治療のために薬を用いることはイスラームの教えに適したことである。しかしその効果と健康はアッラーからもたらされたものだと認識することが必要である。薬を与えられたように健康をも、アッラーはお与えになる。

殊に、信心深い医師の薦めに従うことも、重要な薬となる。なぜなら多くの病気は、間違った使い方や摂生のなさ、浪費、過ちによって、さらには道楽や不注意から起こるものである。信心深い医師は、当然教えに適した形で忠告を行い、支える。病の原因になるようなこれらの要因を禁止し、また慰めを与える。病人はその支えや慰めに信頼を置き、病を軽減させる。苦しみではなく、心地よさを与えるのである。

しかし妄想の病に関しては、そのための最良の薬はそのことに重きを置かないことである。重きを置けば置くだけその病は大きくなり、膨らむ。気にしないようになると小さくなり、散ってしまう。蜂の群れとやりあえばやりあうだけ蜂は人を襲ってくるが、かかわりを持たなければ蜂も散っていつてしまうのと同様である。さらには、暗闇の中で目の前で揺れるひもからもたらされる妄想も、重きを置くに従って大きくなる。重きを置かなければ、そのありきたりのひもが蛇ではないことに気づき、自分が慌てたことに笑うだろう。

この妄想からくる病は、もし長く続けば真実の病に変わってしまひ得る。怖がりであること、神経質であることは人にとって悪い病気である。物事を大げさに見せる。精神的な力を潰してしまう。

特に、無慈悲な半人前の医師、あるいは良心のない医師などに出くわしてしまった場合、妄想はさらに勢いを増す。金持ちであれば財産を使い果たすことになってしまひ、そうでなければ理性が失われてしまひ、健康が害されるかのどちらかである。

第21の治療薬

病を得ている兄弟よ。あなたの病は肉体的な苦痛を与える。しかしその肉体的苦痛を消し去ってしまうほどに重要な、精神的な快楽があなたを包んでいるのである。

なぜなら あなたに父や母や親戚がいるのであれば、とっくに忘れ去られていたはずの素晴らしい

憐れみ深さがあなたの周囲で再びおこり、あなたが子供の頃に見ていたようなあの素敵なたまごしを見ることになる。それと共に、隠されていた友情が、病気というものの引力によって、再びあなたと共にあることになろう。これらに対して、あなたの肉体的な苦痛はたいしたことのないものとなる。

それから、あなたが誇りをもって奉仕してきた人たち、好印象を持ってもらおうと努力してきた人たちが、あなたの病によって、あなたに対していたわり深く奉仕することになるのである、

そしてあなたは、人における憐れみ、本来持っているいたわり深さなどをあなた自身に引き付けているのであり、あなたは何も無いところから助けてくれる友や、憐れみ深い親友を得たのである。

しかもあなたは、困難な奉仕からの休憩の命令を、この病気から得て、休んでいるのである。

だから、あなたのささやかな苦痛のこれらの精神的喜びに対して、あなたは不満を言うのではなく、感謝をしなければならない。

第 2 2 の治療薬

ああ、卒中のような重い病にかかった兄弟よ。まずあなたによいことを知らせよう。信仰する者にとって卒中は素晴らしいものとされている。私はこのことを以前から、聖人とされる人々から聞いていたが、その意味を理解できなかった。今その意味が、このようではないかと心に上ってきたのだ。



聖人と呼ばれる、アッラーに特に強く結びつき、崇拜行為を熱心に行なう人々は、アッラーの承認を得るために、そして精神的危機から救われるために、さらには永遠の幸福を手に入れるために、二つの基礎的事項を実行したといわれている。

一つめ、自分の死への想念。つまり、この世界がはかないものであると同様、人自身も、義務を負った一時的な客人であることを考えることによって、永遠なる生のために努めたのであった。

二つめ、自らの欲望や感情という危険から逃れるために、苦行や修行によって、自らの欲望を抑えようと努めた。

半身の健康を失ってしまった患い人たちよ。あなた方には容易で、幸福の要因となるであろうこの二つの基本事項が与えられたのである。あなたの体の状態は常に、この世界の衰微と、人がはかない存在であることを気づかせているのである。この世界はまだあなたを圧倒することができずにいる。不注意なのんきさは、あなたの目をふさぐことができずにいる。半身不随となっているような状態である人を、欲望、特に無意味で迷信的で罪であるような欲望、欲望を満たすだけの食物などがだますことはできない。このような欲望の危機からすぐに逃れることができるのである。

このように信者は、信仰によって、そしてアッラーにお縋りすることによって、卒中のような重い病から、少しの時間で聖人たちの苦行ほどに、よい結果を得ることができる。その場合、このひどい病気も、たやすいものとなるのである。

私の住む場所からベランダ越しに、濃いピンク色の桜の木があります。一年前に引っ越してきた時にはもっと小さかった木なのに、一年過ぎた今、二周りほど大きく成長していました。今年はまだ花びらが開いていませんが、これから開くのが楽しみです。家から少し歩いた所には大きな桜の木がずっと向こうまで続いています。まだつぼみは固そうですが、その中で、一本の桜の木だけが、開花してピンク色に色づいていました。ここにももう春が来たようです。

失敗して、あるいは後悔してやり直すことは命のある限り可能です。でも死を迎える時には、もう一度やり直しというわけにはいきません。「ああすればよかった・・・」「あんなことしなければよかった・・・」と思って今やり直すことができても、その日がくればいくら後悔しても決してやり直すことはできません。言葉でいうことは簡単でもなかなかそのことを実感することは難しく、エゴや意地、自分のこだわりなどが邪魔をして素直になつたり、間違えを正したりすることができません。やり直しができるうちに間違えたことを正し、やるべきことをなるべく早くやっておきたいものです。

この時期になると、年度末ということもあって、友人とのお別れやまた新しい年度を迎えると新しい人との出会いがあります。人との出会いにおいて私は「一期一会」とあるように出会いを大切にしたいという気持ちがあります。こんなに人がいる中でほんの少しの人としか出会うことができません。そう思うと一生に出会う人の数は限られていて言葉を交わす人、また友人となる人はほんの一握りだと感じます。「出会い」において私が常に忘れてたくないと思うことは、先入観をもたないことや、すぐにその人を判断して型にはめて考えないこと、また他の人から耳にしたその人の評価を気にしないということです。時には事前の情報が必要なことがあります。なるべくなら人から聞いた評価は耳に入れないように努めます。その人にとってマイナスのことは耳に入れない方がよい場合が多いような気がします。口をひらけば良き言葉を語り、さもなければ口をふさいでいるべき・・・という言葉※があるように自分も他の人にとってマイナスになるようなことを口に出すべきでないことが分かります。そんな言葉を心において新しい出会いを楽しみにしたいです。

※

「アッラーと最後の日を信ずる者は、口をひらけば良き言葉を語り、さもなければ口をふさいでいるべきである。アッラーと最後の日を信ずる者は、隣人にたいし寛大であらねばならない。アッラーと最後の日を信ずる者は、客を遇するに寛大でなければならない。」というハディースから



『サトラレ』 sato;ra-re Tribute to a Sad Genius

「人の心がわかれば苦労しないよ」と、いうのはよく聞くセリフです。私も職場や私生活で色々と人が理解不能になる事があり、この言葉を言うことがあります。その人の言いたいのはどういう意味か、何をしたいのか、本当は何を考えているのか、言葉の裏には何があるのか…等々、人間とその心中に関する悩みは尽きません。ですが、果たして本当に「人が思っている事がわかる」なら苦労しないのでしょうか？今回ご紹介する『サトラレ』は、逆に「思っている事が全て周りの人に知られてしまう人」を描いたお話です。

「乖離性意志伝播過剰障害者」通称「サトラレ」とは、自分の考えた事、思った事を口に出していないのに周りの人々に「悟られ」てしまうという、不思議な能力を持つ人のことである。1000万人に1人という確率で存在する彼らは、例外無く想像を超える天才でもある。しかし、彼ら自身がサトラレであるということに気づいてしまうと生きていけなくなるため、政府は彼らを徹底的に保護すると同時に、彼らの能力を国家プロジェクトに役立てるため特能保全委員会を設置した。飛行機事故で両親を亡くした里見健一もサトラレのひとり。ある日、外科医となった彼の元へ防衛医大出身の精神科医・洋子がやって来る。特能保全委員会から彼女に課せられた使命は、健一を新薬研究の国家プロジェクト・スタッフへの道に導くことであった。そのプロジェクトが進む最中、健一のたった一人の肉親・祖母のキヨが末期の膵臓癌であることが判明。彼はキヨに病状を隠し、彼女の執刀医として手術に臨むのであった…。

この『サトラレ』は元々漫画で、それが『踊る大捜査線』の監督・本広克行によって映画になり、その反響からドラマにもなったので、ご存知の方も多いかと思います。私はこの映画が日本映画では一番好きです。

サトラレ自身は、案外普通の人です。確かに知能は天才的ですが、あとは本当に普通の人間です。喜びも、悲しみも、恋もします。ですが、周囲の人間はものすごく苦労をします。それは「サトラレ」の持つ性質と、「サトラレ」であることを彼らに悟らせてはいけなく、というルールによります。彼らを「サトラレ」というレッテルを貼って遠ざけるのではなく、そのことを受け入れて普通に暮らしていかなければならないことによる苦労です。人をありのままに受け入れるという事は、「普通」の人同士でさえ大変な事ですが、ここでは更に、その人の心が全てわかってしまうからその苦労や気遣いがあれこれと加わってきます。この映画を見ると、人の心がそのままわかるよりも、わからないほうがいいのかも、とも思ってしまう。わからないならば、わからないなりに、人の心をわかろうとする努力をしますし、人に自分の心を伝えようとする努力をします。それによって、想いを伝え合う事が出来る様になる。そういった努力によったほうが、人は互いを理解しやすいのではないかと感じます。人のことを考えられない人は、人を大

事にしませんから、人の心を押し量る能力、そして気遣いをする能力というのは人間の持つ素晴らしい能力だと思います。

この、人を思い遣る心、あわれみの心というものを、古代中国の思想家・孟子は「惻隱」と呼び、「惻隱の心は仁の端なり」といっています。それは人間の本質から来るものであって、全ての徳の出発点である、と位置づけました。日本では、江戸期に大成されていった「武士道」において重要視された心のあり方の一つでもあります。武士道では主に仁・義・勇・礼を大切にするそうです。もちろん一番重要なのは正義を行うというものでしょうけれども、その背景には仁の心がなければいけません。人のことを思いやる、考える、というのは、全てのことの始まりなのでしょう。このことは、人の考えがわからないからこそ生まれた発想であると思います。

もちろん、世の中の人みんながいい人というわけではないので、時には辛い思いをすることもあります。分かり合えない事のほうが多いかもしれません。ですが、だからといって投げやりになったりあきらめたりしては、何も始まらないでしょう。何かを始めるためにも、人を思い遣る心、即ち仁心を持つ必要があるのではないのでしょうか。

ところで、平安時代より前の日本では「花」といえば「梅」でしたが、平安以降は「花」といえば「桜」になりました。明治の教育家（と言っていいのかわかりませんが）、新渡戸稲造は著書『武士道 BUSHIDO The Soul of Japan』の中で、「武士道の精神は（武士道の）象徴とする花のごとく四方の風に散りたるあともその香気をもって人生を豊かにし、人類を祝福する」と書いています。武士道という考えかた自体は無くなってしまっても、人の中にあるものだからその精神は続いていき、人を豊かにする、という事でしょう。おりしもこの映画のラストには満開の桜が出てきます。桜の香気がただようように、（とりあえず）日本中に人のことを思い遣る心が漂ったらいいなあ、と思いました。



『サトラレ』 2001年 日本 130分

監督：本広克行

原作：佐藤マコト

出演：安藤政信（里見健一）／鈴木京香（小松洋子）／八千草薫（里見キヨ） ほか



今までのインタビューは、毎月一人の方に仕事や日々の生活を通してお話をして頂いてましたが、今月からは、一つのテーマについて色々な方にお話を聞きたいと思います。今月は「花」「春」をテーマにお話を聞かせて頂きました。



◎「花」・「春」についての思い出やがありますか？

- ・ やはり「桜」かな？普通、花は咲いている時の思い出というのはありますが、花の散るのを見て思い出がよみがえるのは「桜」だけですよね。日本は年度の切り替えがちょうど「桜」の季節ですし皆それぞれに出会いと別れの思い出があると思います。
- ・ 色々な地域でその町の花のイベントがありますが、「桜」だけは、日本全国がイベントですよね。「桜前線」とかニュースにもなってるし。
- ・ 子供の頃母に「小さい白い花」をよくプレゼントしたので、小さな花を見ると母を思い出します。
- ・ トルコに「紙の花」という名前の不思議な花があります。咲いている時から乾いているような感じで、2日間くらい干すとドライフラワーのようになり2～3年は持つ不思議な花です。

◎花についてのエピソードとかありますか？

- ・ お花屋さんが一番手前の目立場所に仏壇に飾る花が置いてあることが多いですよね。菊は日本人にとっては仏華ですけど、外国人の私には判らず、「かわいい」と思って日本人の女性にプレゼントしたら怒られて、目の前で捨てられショックを受けました。その後暫くしてから日本人にとっての「菊」の花の意味を知りました。
- ・ 以前外国の方に「菊」をプレゼントされましたが、花の種類より「プレゼントしたい」との相手の気持ちをありがたく思って喜んで飾らせて頂きました。
- ・ 以前「ラン」の花はお金持ちの方の花というイメージが強かったのですが、たまたま展示会を見に行き小さい「ラン」を見た時、花は成長する過程が凄くユックリしているので「生きてる」と感じなかったけど、その時「花って生き物なんだな」と強く思いました。
- ・ トルコでは家庭でいろいろな花を育てています。綺麗で香りの良いものを花束にして学校など自分の担当の先生にプレゼントしたりします。今でも道を歩いて、花がさいている家を見ると自分の小学校や中学校時代を思い出し、特に駅に向かってる途中なのに出てきた涙を止めるのに苦労します。
- ・ アメリカではよくブルーの花を見かけます。青い塗料を吸わせて菊や薔薇等をブルーにするんです。家の中にも良く花を飾りますね。花を見ると気持ちが和らぐような感じがします。
- ・ 日本はあまり花を贈らないようですが、花見などを考えると、自然を大切にす民族のように思います。道や人の名前にも花の名前が多いですよね。



人々は、その重要性の程度によって、他の人またはものに注意を払います。このように、世界の主が、人々に啓示を下された中ではっきりと何かに言及されたならば、それはきっと、我々がよく考察しなければならぬものなのです。

聖クルアーンは、家畜章、蜜蜂章、御光章、眉をひそめて章、無花果章では直接的に、また信者たち章では間接的に、オリーブについて言及しています。オリーブについてのクルアーンにおける章句と預言者のお言葉を熟考すると、我々はオリーブが、その木も油も、重要性を与えられていることを眼にすることができます。

オリーブの木

オリーブの木（それは平均して 300 年から 400 年生きます）は、多くの注意を必要とします。オリーブは主にトルコ、ギリシャ、イタリア、スペインと北アフリカで、そして、16 世紀以降は北アメリカや南アメリカ、中国や日本においても植えられています。

オリーブは約 6000 年前から人によって植えられてきましたが、オリーブ自体は、それよりはるか以前から存在していました。39,000 年を経たオリーブの木の化石が、サントリン島で見つかっています。この発掘物はまた、古代都市クラゾメナイ（今のトルコのイズミルに近い）が、オリーブとオリーブ油のための重要な中心地であったものであることを明らかにしています。今日、9 億本以上のオリーブの木が世界に存在し、その 98 パーセント以上は地中海沿岸の国々にあります。そこでオリーブは、およそ 1000 万ヘクタールの土地を占めているのです。

オリーブを栽培する人々は、オリーブだけでなく、その木の枝、葉と根からも効用を得ています。葉は刈り込みの後、乾かされ、飼料として使われたり、いろいろな民間療法の薬が作られたりします。刈り込みによって得られる枝やその根は、火をおこす薪の需要の大きな部分を満たします。

オリーブの特性

各々のオリーブの木は、気象条件と耕作方法の改良により、以前よりは大量の実を、年に一度実らせませす。

オリーブの重さは 2 グラムから 12 グラムです。穴の部分は 13 パーセントから 30 パーセントを占め、食べられる部分は 66 パーセントから 85 パーセントになります。そして残りが皮になります。朝食用のオリーブは、より薄い皮と小さな穴を持ちます。青いオリーブの食べられる部分 100 グラムは、私たちに 144 カロリーのエネルギーを与えます。またこれは 13.5 グラムの脂肪、2.8 グラムの炭水化物、1.5 グラムのた



たんぱく質、90 ミリグラムのカルシウム、2 ミリグラムの鉄、300IU のビタミンAをも含みます。これに対して、黒いオリーブの食べられる部分 100 グラムは、207 カロリーを私たちに与え、同時に、21 グラムの脂肪、1.1 グラムの炭水化物、1.8 グラムのたんぱく質、77 ミリグラムのカルシウム、1.6 ミリグラムの鉄、60IU のビタミンAを含みます。両方の種類のオリーブとも、その他のビタミンやミネラルを微量に含んでいます。

油の重要な源であることに加えて、オリーブはビタミンA、鉄、カルシウムを多く含みます。この栄養価の高さは、多くの人の知るところとなっています。

過去数年において、オリーブのたんぱく質から見つかった一群の物質に関する重要な研究がなされてきました。最近までこの一群の物質はあまり注目されていなかったのです。イタリアのメッシーナ大学の Bisignano 氏達は、オリーブのポリフェノールに見られるセコイリドイドと、微生物に対するそれら影響を調査しました。彼らは、セコイリドイドが我々の呼吸・消化システムで、バクテリアが引き起こす病気の進行を防ぎ、遅らせるということを発見しました。オリーブとオリーブ油についてのこれらの研究をもとに、いくつかの物質が、新しい抗生物質を開発するためのソースとして提言されています。

オリーブ油

およそ 160 万トンから 260 万トンのオリーブ油（オリーブの最も重要な製品）が、毎年生産されます。このうちの 75 パーセントから 80 パーセントは生産国によって消費され、残りは他国に売られます。



オリーブ油は、オリーブをしぼって、物理的な手段でいわゆる「黒いジュース」を分離させることによって抽出されます。化学的な方法は使われません。オリーブ油には主に 3 種類あります。ナチュラルオリーブ油、これは最高品質で、生で消費されることができ、普通サラダやソースで使われます。精製オリーブ油は物理的な精製によって酸度が減らされ、より味がよいもので、通常料理に加えられます。リビエラ・オリーブ油はナチュラルオイルを 10 パーセントから 20 パーセント、精製した油に加えることによって作られ、主にフライ用に使われたり、料理において加えられたりします。

オリーブ油は 99.8 パーセントの純度のトリグリセリド（脂肪の一種）です。これは、14%の飽和脂肪酸、72%の一価不飽和脂肪酸と 12%の多価不飽和脂肪酸からなります。さらにまた、300 ミリグラムのフェノールと 150 ミリグラムのトコフェロールが 1 キロのオリーブ油に含まれます。他の料理油と比較すると、オリーブ油は非常に高い割合で、一価不飽和脂肪酸であるオレイン酸を含むことが示されています。

オリーブ油の効能

注目すべきは、オリーブ油が大量に消費される地中海周辺の国では、心血管疾患やガンの発生がより少ないという点です。心血管疾患を引き起こすことで有名なコレステロールは、我々の血の中にある二つのグループのリポタンパク質、LDL と HDL によって運ばれます。肝臓はより効果的に、HDL によって運ばれたコレステロールを分解します。そして、それは心血管疾患の危険性を減らします。他方、LDL に

よって運ばれるコレステロールは、心血管疾患の主な原因となります。したがって、血液中の LDL の濃度が低く、HDL の濃度が高いことが、心血管疾患に対する抵抗力となるのです。オリーブががんの発生を減らすのは、そのフェノール群の酸化防止剤効果に起因するものと考察されています。これらの物質は酸化防止剤効果によって、損害を与え得る物質を中和し、DNA のダメージを元に戻すのを助けると考えられています。ドイツの Oncology リサーチセンターのオーエン氏達は、オリーブ油がそのフェノール類の酸化防止剤機能により、冠状動脈性心臓病や一部のガン（例えば大腸ガン、肺ガン、皮膚ガン）の発症を防ぐと報告しています。

スペインのセビリア大学のアルロン・デ・ラ・ラストラ氏とその仲間は、オリーブ油のよい影響を評価する論文を発表しました。この論文で彼らは、オリーブ油が血液中の LDL コレステロールを減少させ、HDL コレステロールを増やすことによってガンの危険性を減らすと報告しています。またトリグリセリド代謝に対するその影響によって、特に大腸ガンや肺ガンの発生を抑えるとしています。論文によれば、オリーブは、慢性関節リウマチのような自己免疫疾患の発生を減らします。そしてオリーブは、分泌を促すことによって胆嚢結石を防ぎます。また、胃に対しても働きかけ、潰瘍の形成を減らして、既存の潰瘍の回復を容易にします。

日本の金沢大学のグループの研究では、外部に発癌性紫外線を浴びたネズミにオリーブ油を与え、その効果が調べられました。ネズミを3つのグループに分け、最初のグループはオリーブ油を与えられず、第2のグループは紫外線を浴びる前にオリーブ油を与えられ、第3のグループは浴びた後にオリーブ油を与えられました。研究者たちは、第3のグループで、他の2つよりはるかに低いガンの進行率を認めたのです。

結論

私たちの心臓、血管、そしてガンのメカニズムをご存知であられる全能なるお方は、その治療手段を我々のすぐそばにある木に用意されたのです。オリーブ油には、他のまだ発見されていない特性があると信じられています。これらの特性が発見されれば、その消費量は増加するでしょう。そして同時に、それは新しい薬と治療方法の開発をもたらすでしょう。加えてオリーブ油は、医療および化粧品産業で一般的に用いられています。オリーブ油はいろいろな髪や皮膚病の治療にも、すでに用いられています。神からの恵みであるオリーブ油はおそらく近い将来、より多く利用されるようになるでしょう。





今回ご紹介する2作は、ご紹介したくてたまらないのですが、あまり内容にふれてしまうと読んだ時の感じも変わってしまうおそれがありますので、言いたいのに言えない、そんなもどかしさを含んでしまう2作であります。何に関する本か？それも、あまり言わないほうが良いと思います。

『どんなかんじかなあ』は、絵本です。表紙に男の子の絵が描いてあります。にっこり微笑んでいる絵です。この本は、絵本などに詳しい友人から教えてもらいました。電話で内容を教えてもらい、興味を持って、購入しました。テーマは題の通り、「どんなかんじかなあ」という疑問です。果たして何がどんなかんじなのか？皆さん、この絵本を見かけられたときは、ぜひ「どんな絵本かなあ」と、お手にとってみてください。

もう1作、『だれが石を投げたのか？』をご紹介します。こちらは本です。原題は“STOLPERSCHRITTE”『つまづき歩き』というような意味らしいです。この本の表紙にも男の子の絵が描いてあります。でも、頬杖をつき、悩み事でもあるような顔をしています。「つまづき歩き」と、「石」と、主人公の顔と。あとがきには、関西弁で言う「うまいこと」説明されています。

私はこの本を最初に読んだ時、そうとうショックを受けました。また同時に、なんて斬新で新鮮な切り口なんだろうと思いました。最初のページから、扉から、「え？」「ええ？」とひきこまれていく感じです。

「だれが石を投げたのか？」のモチーフは、『聖書』のなかの石打ちの逸話です。それも私は読んでから気がつきました。最後の方に、主人公が自問しているところで出てくるのですが、その題名の意味に気がつくまでに予想していたこととだいぶ違い、「うわあ、そうなのかあ…」と、読書をしているだけなのに大きな衝撃を感じたことをおぼえています。

この本の作者、ミリアム・プレスラーさんの他の作品には、『ビターチョコレート』などがあります。

微笑んでいる男の子の絵本と、頬杖をついている男の子の本、ぜひ一度どうぞ。

* 今回ご紹介した本（筆者の手元にある版）

『どんなかんじかなあ』中山千夏ぶん 和田誠え 自由國民社

『だれが石を投げたのか？』ミリアム・プレスラー 作 松沢あさか訳 さ・え・ら書房

購読価格（郵送料込み）バックナンバーは、1部 200円（日本以外は1部 250円）

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号： 00140-4-574489 口座名義： Yasuragi

三井住友銀行 店番号：005（春日部） 口座番号：7315959 口座名義：Yasuragi
皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com> info@yasuragiweb.com yasuragi_nihon@hotmail.com

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部